

一七世紀イギリスの小売製本の価格

——一六六九年版『製本価格要録』にみられる英語本の事例——

石 井 健

はじめに

一七世紀後半にイギリスで出版された書物の価格を探ろうとするとき、『ターム・カタログズ』は重要な史料である。『ターム・カタログズ』とは一六六八年に刊行が始まった季刊の出版広告誌のことだが、ここには新刊書の書誌情報が掲載されており、その中には価格についての情報も含まれている。例えば、ジョン・バンヤンの『天路歷程』の初版(一六七八年)は次のように記されている。

“The Pilgrim’s Progress from this World to that which is to come; delivered under the Similitude of a Dream: wherein is discovered the manner of his setting out, his dangerous Journey, and safe arrival at the de-

sired Country. By J. Bunyan. In Octavo. Price, bound, 1 s. 6 d. Printed for N. Ponder at the Peacock in the Poultry.”⁽¹⁾

ここで問題となるのが「bound」という単語である。「bound」とは「製本された」という意味で、つまりこの本は「製本された」状態で「一シリング六ペンス」で売られていた、ということになる。

歴史的製本研究の分野では、一五世紀中葉の印刷術の発明から一七世紀初めまでの製本を大きく二つに分類している。装飾の見事な豪華製本 *fine binding* と平凡な小売製本 *trade binding* である。しかも、この区分は単に装飾の違いを意味するものではない。それはまた当時の書物売買に関する商習慣の違いをも意味している。当時は現在とは

違い、版元 publisher から小売の本屋 bookseller に本が卸されるときには製本されていない刷紙 (刷本) sheet の状態で行われていた。そして本屋はその刷紙をそのまま売るか、折り畳んで折丁に仕立てた上で売るか、折丁を平とじにして、場合によっては青か茶色の紙ラッパーをつけて売るか、あるいは、あらかじめ製本した物売るかして⁽²⁾いた。客は、自分の好みの装丁が欲しいなら、刷紙や平とじ本などを買い、それを製本業者に注文するが、そうでなければ、本屋で売られている装丁で満足することとなる。客が自分好みの製本を注文すれば、完成した装丁は趣向を凝らした美装本になるであろうし、一方、本屋があらかじめ製本しておくのであれば、客が購入するまでは製本代が自分たちの負担になってしまふので、本屋としてはなるべく安く平凡な小売製本を求めることになるだろう。つまり、豪華製本は客の注文による製本を、小売製本は本屋向けの製本を意味していることとなる。⁽³⁾

『ターム・カタログズ』が顧客向けの新刊本広告誌であることからすると、その中に現れる「価格」は本屋が客に対して示す小売価格を、その時の「製本」は小売製本を意味することになる。であるとすると、かつてフランス・

R・ジョンソンが指摘したように、様々な書物の価格を比較検証しようとする場合には、その中に含まれる小売製本の価格がいくらであつたかを知る必要があるだろう。ところが、小売製本の価格がどのような仕組みで決められていたのかを説明する当時の文献も、またそれを考察した研究も管見の限りでは見当たらない。⁽⁴⁾

幸い、小売製本の価格体系を表していると思われる史料が現存している。そこで本稿はこの史料を読み解き、一七世紀イギリスの小売製本の価格体系を説明することを目的としたと思う。以下の構成は次の通りである。第一に、史料を批判的に検討し、この史料を使って小売製本の価格を考察する際の留意点を明らかにする。第二に、史料から読みとれる小売製本の価格体系の原理を明らかにする。

1 『製本価格要録』の特徴

『様々な種類の書物の製本価格の要録』(以下『要録』と略す)という標題を持つ一枚物のブロードサイドが現存している。それは書物別の製本価格を一覧にしたものである。一七世紀については四種類のものが現存しており、それぞれ一六一九年、一六四六年、一六六九年、一六九五年に出

版されている。一六一九年版と一六四六年版はロンドンで印刷されたことが分かるのみでそれ以上の書誌情報は紙面から得られない。一六六九年版はその内容、つまり製本価格が製本業者間で了解され、ロンドン書籍商組合の理事会に八月二日に提出されたこと、九月二三日に検閲官ロジャー・レストレンジから出版許可を得たことが紙面から分かる。また、紙面には了解した製本業者八二名の氏名が掲載されている。一六九五年版もその紙面から、ロンドン市民である製本業者間で了解され、一六九五年三月に開かれた組合理事会に提出されたこと、ステイションナイズ・ホール近くの本屋ジョン・ホワイトロックによってロンドンで印刷され販売されたことが分かる。また、一六九五年版は子牛革による製本のみを対象としていることが標題に示されている⁽³⁾。

現存する四つの『要録』は製本価格の分類と配列の仕方に違いがあるものの、ある具体的な(ただし簡略化された)書名に続いてその製本価格が記述されるという点ではいずれも共通している。しかも、書名の後には「or the title」(準じたもの)という表現が続いていることが多い。これは書名のあげられている本がある特性を持った本全体

の代表として扱われていることを示すものと考えられる。では、本のような特性を代表しているのか。同じ『要録』内には、具体的な書名がなくなつた「薄いポット紙二折判すべて」とか「小型ポット紙四折判すべて」といった記述の後に製本価格が記されている場合がある。つまり、これらは本の仕立てに関わる物理的な特徴が合致するものはすべて同じ製本価格であることを示している。こうした表現から判断して、『要録』にあがっている具体的な書名はその本の物理的構造に関する特性(紙の種類と大きさ、頁の厚さ、判型)を代表するものであり、したがって同様の物理的構造を持つ本全体の代表としてその製本価格が示されているものと思われる。そうであるとすれば、この書名を手がかりに該当する現存の書物を割り出し、その物理的構造を調査すれば、小売製本の価格体系を明らかにすることが可能となるだろう。書名には、聖書、祈祷書、詩篇といった典礼用の書物の他、世俗のラテン語や英語の本が登場しているが、この中では英語本が技術的な理由、つまり、様々な書誌を利用しやすいことから現存の書物を一番割り出しやすいので、世俗の英語本に対する小売製本の価格体系を本稿では主な対象とすることになる。

しかしながら、これら『要録』に記載されている製本価格は実際の商取引の現場とはどのような関係にあったのだろうか。一六九五年版についてはロンドン書籍商組合の理事会議事録 Court Book からその辺の事情をうかがい知ることができる。ロンドン書籍商組合は「書籍商」の組合を名乗っているが、実際には印刷工、本屋、製本業者を含む出版業全体を包括する同業者組合である。その起源は中世にまで遡り、もとは写本生産（書写、装飾、製本）・販売の同業者組合であったが、印刷術の伝来以降、その職種の構成が変化した。一五五七年には国王から特許状を得て法人化し、その前後に版權管理権とロンドン内外での非合法出版への取り締まり権を獲得したため、事実上英国全体の出版業を支配する団体となった。組合は組合長と二人の監事を含む一八人の理事からなる理事会 Court of Assistants を頂点に、リヴァリー、ヨーマンリーからなる。ヨーマン、つまり組合員になるには徒弟修行、相続、買取りの三つの方法があり、いずれかの方法で市民権を得ると同時に組合員となった。親方も職人も区別なくヨーマンリーを構成した。リヴァリーはヨーマンリーから選ばれ、さらに理事はリヴァリーから選ばれた。理事会が組織運営

の最高機関であり、ここで審議された事項を記録したものが理事会議事録である。⁽⁶⁾

この理事会議事録の一六九五年三月四日の項に次のような記事が存在する。「複数の製本業者から、価格が安く革が高いことよって彼らが陥った不況を指摘する請願がこの理事会に示され、添付された価格表への賛同を懇願している⁽⁷⁾」。この「添付された価格表」が一六九五年版『要録』であることは、『要録』標題に一六九五年三月に開かれた理事会に提出されたことから間違いないだろう。また、一六九四年に子牛の価格が高騰しており、一六九五年版が子牛革による製本のみを対象としていることと一致している。つまり、製本価格が安いことに加えて、前年に生じた子牛革の高騰が製本業者に不景気をもたらしたので、景気回復の方策として製本価格の引き上げを内容とするこの『要録』が製本業者側から仲間の書籍商や印刷工、書店に示されたということになる。

製本業者の困窮を理由に製本代の引き上げを求めたものであるという一六九五年版の性格が他の『要録』にも当てはまるかどうかは明確な証拠がないためにわかに断定はできない。しかし、一六一九年版については、その出版が製

本業者の貧困と無関係ではないことを示す史実が存在する。理事会議事録によると、一六一九/二〇年三月六日に「一六一二年五月一九日に出された命令」を無効とし廃棄するという命令が出されたことある。「一六一二年五月一九日に出された命令」とは、一五八六年の星室庁の布告の結果、貧しい製本業者などが徒弟を同時に一人しか雇えないので困窮していることから、その緩和を認めた命令のことである。⁽⁹⁾この「緩和令」を廃棄するのであるから、製本業者にとっては痛手であったはずである。一六一九年版がこのような状況と無関係であったとは考えにくい。おそらく「緩和令」廃止に対する製本価格関係の代替案であったのではないだろうか。

一六六九年版『要録』にはその内容に合意した製本業者八二名の氏名が記載されている。書籍商組合の徒弟記録とつきあわせてみると、八二名のうち二〇名ほどは書籍商組合員としての履歴をたどることができない。彼らには書籍商組合の徒弟だった記録も、徒弟修業を終了して組合員となった(つまり、市民権を得た)記録も残っていないのである。⁽¹⁰⁾一六六九年版が組合理事会に提出された上での出版であることからすると、これだけの非組合員が含まれてい

るのは奇妙である。これはどのような理由から出版されたものであったか。

理事会議事録の一六六九年八月二日の欄には『要録』について何も記録されていない。しかしその一月ちょっと前、六月二五日の欄に次のような二つの事件の判決が記録されている。「フレッチャー(ジョン・リー氏宅に居住)は海外で印刷された詩篇を英語聖書とともに製本したことにより出頭することを命ずる」。「王室印刷人King's Printerが海外版聖書の製本についてランズという製本業者に対する訴訟を起こすときには、組合は彼の海外版詩篇の製本に対して同じことを行うよう命ずる」。⁽¹¹⁾また一六六九年版『要録』出版後の一〇月四日には、製本業者トーマス・ハートリーのもとから三五冊の詩編が押収されたとの報告が理事会議事録に登場する。その後の調べで一三〇冊の初級読本Printerが押収され、最終的に二五七冊の海賊版初級読本を製本した罪で彼は処罰されている。⁽¹²⁾

聖書の印刷・出版が王室印刷人の特権であったのに対し、詩篇や初級読本の印刷・出版はロンドン書籍商組合が「イングリッシュ・ストック」として独占権を持っていた。イングリッシュ・ストックは書籍商組合の株式会社の側面を

示すもので、一六〇三年に国王から詩編や暦や初級読本の印刷・出版独占権を得て成立した。組合長、監事、理事会選出の取締役らが運営に当たった。出資金は当初九〇〇〇ポンド、一六一四年から一八世紀まで一四四〇〇ポンド。理事株（一五株、一株三三〇ポンド）、リヴァリー株（三〇株、一株一六〇ポンド）、ヨーマンリー株（六〇株、一株八〇ポンド）に分けられ、組合内での身分に応じて保有株式の種類が決められていた。組合員は株式の保有を通じて出資し、出資額に応じて配当を受けたが、株式は限られていたから、保有者は組合内でも特権的な存在であった。さらに、その製本についても「詩篇製本業者」⁽¹³⁾「初級読本製本業者」が組合によって決められていた。フレッチャー、ランズ、ハートリーはこうした独占を犯し、その旨味にありつこうとしたのだろう。

製本業者の不正行為はこの時期だけのことではない。発禁書の海賊販売に製本業者が関わっていたことを匂わす事件は一六世紀以来たびたび記録されている。彼らが不正を犯してまで旨味のある商売に手を染めたのは、やはりその貧しさ故ではなかったか。そしてこうした事件が頻発した時期に、非組合員の製本業者とともに決めた製本価格を

記載した一六六九年版『要録』が出版されたことは全くの偶然であろうか。価格に合意した製本業者の中には当時の二人の理事の名前があり、そのうちの一人は王室製本家サミュエル・マーンであった。つまり、一六六九年版は組合理事会の容認の下に出版されたと言っている。その価格には単なる現状を追認した以上の意味、不正行為を防ぐためにその背景にある製本業者の貧困を解消しようという意図が込められていたと見るべきではないだろうか。実際一六四六年版と同じタイトルの本の製本価格が前よりも少しづつ上がっている。

以上の諸点を総合すると、『要録』に記載されている製本価格は、市場での実際の製本価格をそのまま示したものはなく、おそらく製本業者がそれを引き上げようという意図の下で示された価格体系であるといつてよいだろう。しかしそれだけに『要録』の価格体系は、いわば製本の「生産者価格」決定のメカニズムを見る上で格好の史料であるということが言えるだろう。

2 小売製本の価格体系

(1) 価格帯

小売製本の価格帯については時期により多少の変動がある。一六一九年版『要録』では、最高額は二折判欽定訳聖書の小口・角箔押し装飾・子牛革装が一五シリング、次いで二折判のフォックス『殉教者伝』のフィレットによる空押し装飾・子牛革装が一ニシリング、二折判ジュネーブ版聖書の総箔押し装飾・子牛革装が一ニシリングと続き、最も安いのは一六折判と三ニ折判の詩篇の羊革装が二ペンスであった。ここでいう箔押しとは、金箔を使って革を装飾する技法で、一六世紀中葉にイタリアからイギリスに導入されたものである。「小口・角」「総」は、革装のどの部分に箔押しをするかを示している。また空押しは、革装に模様を刻印する技法で、中世以来の伝統的な装飾技法である。一六世紀以降はフィレットやロールといった工具を使って行うようになった。⁽¹⁴⁾

一六四六年版では、二折判三巻本のラテン語版『大アトラス』のフィレットによる空押し装飾・子牛革装が一ポンド一〇シリング、二折判二巻本の英語版『アトラス』の

フィレットによる空押し装飾・子牛革装が一ポンド、初級読本の羊革装・箔押し装飾が一ポンドの順に高額で、逆に最低価格は文法書、賛美歌集その他の小型本の羊革装が二ペンス半であった。

一六六九年版では、二折判三巻本のラテン語版『大アトラス』の子牛革装が一ポンド一〇シリング、二折判九巻本『聖なる批評』のロールによる空押し装飾・子牛革装がやはり一ポンド一〇シリングと高いが、一冊ものでは初級読本の羊革装・箔押し装飾が一ポンド、オジルビー編二折判聖書の子牛革装・小口箔押し装飾が一ポンド、同じ本のフィレットによる空押し装飾のみのものが一ニシリングであり、逆に最も安いのは羊革装で大型二ニ折判の『時間の償い』と薄い二四折本で、いずれも二ペンスであった。ちなみに、同じ頃、王室製本家サミュエル・マインの工房では、国王用の豪華製本が一点数ポンド、時には四〇ポンドもの費用で製作されており、それと比較すると『要録』の価格帯は全体的に安めであることが明瞭である。ただし、箔押し装飾の場合には豪華製本に近いほどの製本代がかか

る。⁽¹⁵⁾
一六九五年版では、オジルビー編二折判聖書の小口箔押し

し裝飾が一ポンド、二折判二巻本のラテン語『多言語辞典』と二折判四巻本の『マントン著作集』(英語)が一五シリング、二折判四巻本の『グロティウス著作集』(ラテン語)と同じく二折判四巻本の『ハモンド著作集』が一四シリングで、最低価格は小型一二折・二四折判が六ペンスであった。ただし、一六九五年版については子牛革装のみの価格であるから、羊革装を含めると最低価格はあまり上昇していない可能性もある。実際、一六六九年版の子牛革装の最低価格は五ペンスであるから、実際にはそれほど上昇してない。

以上をまとめると次のようになる。すなわち、最高価格は一七世紀中葉に一時高くなるが、それでも一ポンド半を超えることはなく、一七世紀末には一ポンドとなった。また最低価格は一七世紀中葉まで二ペンスから二ペンス半であった。

(2) 価格決定の諸変数：一六六九年版の場合

四つの『要録』の記述からは、表紙の材料(子牛革か羊革か)、裝飾の種類(箔押し裝飾なのか空押し裝飾なのか、どのような工具を使っているか、等)、判型(二折判なのか、四折判なのか、八折判なのか、もっと小型なのか)、

本の厚さ(頁が厚いのか薄いのか)、使われている用紙の大きさ(ポット紙なのか、フルルスキヤップ紙なのか、クラウン紙なのか、等)の五つの変数が製本価格の決定に大きく関わっていることが読みとれる。この関係をより明確にするため、一六六九年版『要録』を英語本に限り詳しく見てみることにしよう。英語本に限ったのは、ラテン語本では出版地がイギリスに限られず、著者と標題に関する情報だけでは現物資料を特定することが難しいからであり、聖書などの場合には出版された版も多くの年のどの版であるかを特定することがやはり難しいからである。また、一六六九年版を選択したのは、四つの中では英語本について製本価格を決める様々な要素がバランスよく含まれているからである。

表1は、一六六九年版『要録』に登場する英語本の書名のうち、該当する本の葉数、丁数、用紙の大きさと製本価格を対応させて一覧表にしたものである。⁽¹⁵⁾各要素ごとに考察してみよう。

① 表紙の材料

一七世紀当時の本の表紙は厚表紙 board に革を張るのが一般的で、特に小売製本ではそのための材料として子牛

表1 1669年の製本価格表(英語本)

(1) 二折判						
	Books in Folio, English	s	d	No of Leaves	No of Gatherings	Paper Size
1	<i>Osby's Chima, Virgil</i> , all his other Books, or the like, in single Vol Mable Fillets	8	0	245-299	73-111	royal
2	<i>Aesop</i> compleat in one, <i>Iliads</i> and <i>Odyssees</i> in one, or the like, Marble Fillets	10	0	377-522	62-121	royal
3	The same Books plain	7	0	377-522	62-121	royal
4	The same Books single	5	0	187-317	29-75	royal
5	<i>Kings Works</i> , or the like	3	6	681	119	demy
6	<i>Hammond</i> on N Testament <i>Poultons Stat</i> or the like, Rolls	3	0	491	82	demy
				758	131	crown
7	<i>Davila's Hist Rawleighs Hist</i> or the like	3	0	630-748	155-186	crown
8	<i>Plutarchs Lives Heylins Cosmog</i> or the like	2	6	494-590	102-119	crown
9	<i>Coigraves Dict Bakers Chronicle, Taylors Cases of Conscience</i> , Rolls	2	0	454-586	78-119	foolscap
10	<i>Life of Christ</i> , Rolls	1	10	326	77	foolscap
11	<i>Hammond</i> on <i>Psalmes Spotwood Hist</i> , or the like	1	8	299-380	72-88	foolscap
12	<i>Cassandra</i> , or the like	1	6	439	108	pot
	Small Folio					
13	<i>Fullers Holy War Hubbards Reports Baccatin</i> , and the like All Pot Folio's small	1	4	168-218	40-62	pot
	<i>Sheeps Leather</i> , Folio's					
14	Ottoman Empire, or the like, Rolls	1	2	125	31	pot
15	<i>Noyes Reports</i> , or the like, Rolls	1	0	104	29	pot
16	All thick Pot Folio's	1	0	-	-	pot
17	All thin Pot	0	10	-	-	pot

(2) 四折判						
	Books in Quarto, English	s	d	No of Leaves	No of Gatherings	Paper Size
18	<i>Goldman</i> , or the like, Rolls	1	6	746	101	demy
19	<i>Hughs Grand Abridgment</i> , being 3 Vol Rolls	4	0	1424	360	crown
				[428-524]	[108-131]	
20	<i>West's Presidents Thomas Dict</i> or the like	1	2	510-668	67-86	crown
21	<i>Carlils twelfth part</i> , or the like	1	0	540	135	pot
22	<i>Baxters Saints Rest</i>	1	2	436	56	crown
23	<i>Baxters Reasons</i> , Rolls, And all such English Quarto's thick	1	0	316	80	pot
24	All small Pot-paper Quarto's Rolls	0	10	-	-	pot
	Large Quarto, Sheep					
25	<i>Placia Rediva</i> , or the like, Rolls	0	10	268	67	crown
26	All thin Crown Rolls	0	9	-	-	crown
27	All Fools-Cap, or the like, Rolls	0	8	-	-	foolscap
	Quarto's Pot-paper, Sheep					
28	<i>Sittingfeets Origines Sacra</i> , or the like, Rolls	0	8	326	82	pot
29	All thick Pot	0	6	-	-	pot
30	All thin Pot	0	5	-	-	pot

(3) 八折判						
	Books in Octavo, English	s	d	No of Leaves	No of Gatherings	Paper Size
31	All large Octo <i>Decay of Piety</i> , or the like	0	9	237	30	demy
32	<i>Taylors Living and Dying</i> , or the like	0	8	321	40	crown
33	All thin Crown Octavo's	0	7	-	-	crown
34	All Pot Octavo's, <i>Quarles Poems</i> , &c	0	6	245	31	pot
	Octavo's Large *					
35	<i>Decay of Piety</i> , or the like	0	5	237	30	demy
36	<i>Gent Callings</i> , or the like	0	4	98	13	demy
37	<i>Records Arithm Erasmus Colloq Testaments Octo Rom</i> or the like	0	4	248-280	31-35	crown
38	All thin Crown, and all Fools-Cap	0	3 5	-	-	crown
				-	-	foolscap
	Octavo Pot *					
39	Test Octo Com <i>Quarles Poems. Randolphs Poems Hools Corderus</i> , or the like	0	3	212-245	27-31	pot
40	All thin Pot	0	2 5	-	-	pot

(4) 一二折判以下						
	Books in 12. and 24.	s	d	No of Leaves	No of Gatherings	Paper Size
41	All large Twelves	0	6	-	-	-
42	All small Twelves and Twenty-four's	0	5	-	-	-
	Large Twelves *					
43	Present State of Eng Pr. of <i>Piety</i> , or the like	0	3	240-270	20-23	crown
44	<i>Meads</i> almost a <i>Christ Ac of Com</i> the like	0	2 5	150-181	13-15	crown
45	<i>Redemption of Time</i> , or the like	0	2	126	11	crown
	Pot Twelves *					
46	<i>Baxters Call Doct Bible</i> , or the like	0	2 5	144-216	12-18	pot

出典 A general note of the prices of binding all sorts of books &c 1669

註 行番号は筆者の任意につけたものである。*は羊革装。

一六六九年版『製録』に登場する書名を確認するに際し、Wing 2nd ed と British Library Catalogue を参考にした。また、所蔵調査に際しては、英国図書館とオックスフォード大学ボドリー図書館についてはオンライン・カタログを利用した。

革と羊革がよく使われた。『要録』には、一六九五年版を除けば、子牛革が使われていることが明記されてはいないが、当時の事情から判断して、表装材に関する記述がない場合は子牛革装であったと考えるのが妥当である。その点をふまえた上で表1を見てみると、ある本を子牛革装にする場合は羊革装にするよりも約二倍の製本価格が設定されていることが分かる。『信心の衰退』(31・35―表1の行番号を指す。以下同じ)は子牛革装で九ペンス、羊革装で五ペンスであり、フランシス・コールズの『詩集』(34・39)は子牛革装で六ペンス、羊革装で三ペンスである。これはおそらく材料である子牛革と羊革の価格の差を反映しているものと思われる。一七世紀後半の子牛と羊の価格を比べると、子牛一頭が平均一三シリングであるのに対し、羊一頭は一〇シリングである。ただし、価格変動が激しく、羊の価格の方が子牛の価格よりも高くなる年も少なくない。⁽¹⁷⁾

② 装飾

当時の装飾技法は箔押しと空押しに大別されるが、一六六九年版『要録』では初級読本の製本価格でその価格差を知ることができる。初級読本にはフィレットによる箔押しと空押しを選択があり、箔押しの場合には一ポンド、空押し

しの場合には一〇シリングとなっていて、二倍の価格差がつけられている。この差は当然金箔を使うか否かから生じているといえよう。

ところで一六六九年版『要録』では、箔押し装飾はこの初級読本の他には、聖書や祈祷書・詩篇といった典礼書にだけいくつかの選択肢があり、その他の世俗本では、オルビー編集の『中国』(1)やウェルギリウス(1)、イソップの『寓話』(2)やホメーロスの『イーリアス』・『オデュッセイア』(2)に「マーブル」⁽¹⁸⁾の記述があるのを除けば、空押し装飾のみである。小売製本の場合、世俗本には箔押し装飾を行わないのが一般的であったということであろう。

しかし、その空押し装飾でも使う道具の違いによって価格差が生じている。ただし、ここで注意すべき点がある。英語本には次の二種類の装飾しか明記されていない。『Marble Fillets』と『Rolls』である。それ以外には特に記述がないが、これはおそらくフィレットによる空押し装飾を意味している。この当時に製作されたとされる小売製本は、管見の限りでは、たいていは表紙の端に沿ってやや内側に筋の入った非常に簡素な空押し装飾を持っている。

この筋はフィレットを使ってつけられたと考えられるので、フィレットによる空押し装飾の装丁が非常にありふれたものであったといえるだろう。⁽¹⁹⁾したがって『要録』で装飾記述のないものは、おそらくこうしたフィレットによる空押し装飾を指しているものと思われるが、今のところ確証はないので、ここでは記述のないものは「並装飾」と仮に呼んでおくことにする。

この並装飾とロール装飾を比較すると、ロール装飾の方が若干製本価格が高くなる。ロール装飾のジェレミー・テイラー『キリストの生涯』(10)は一シリング一〇ペンス、同じ用紙・同じ判型・ほぼ同じ葉数で並装飾のヘンリー・ハモンドの『詩篇について』(11)やスポテイスウッド大司教の『スコットランド教会史』(11)は一シリング八ペンスであった。また、マーブル装飾のあるなしも製本価格に明確に反映されている。オジルビー編集版のイソップの『寓話』(2)やホメーロスの『イーリアス』・『オデュッセイア』の合本(2)はマーブルにフィレットの装飾をつけると一〇シリングであるのが、並装飾の場合(3)には七シリングであった。

③ 用紙の大きさ

表1に登場している用紙は、ロイヤル(二三・五〜二四×一七・五〜一八インチ)、デマイ(一九・五〜二〇・五×一四・七五〜一五・五インチ)、クラウン(一八・一〜一九×一三・七五〜一四・五インチ)、フルスキャップ(一七×一三〜一三・二五インチ)、ポット(一六×一二・二五インチ)の各紙であるが、⁽²⁰⁾大きい用紙が使われている本ほどその製本価格は高い。用紙の大きさのみが違う二つの本を比較してみると、例えば、デマイ紙・二折判のチャールズ一世の『著作集』(5)は三シリング六ペンス、クラウン紙・二折判のサー・ウォルター・ローリーの『世界史』(7)は三シリングであり、クラウン紙よりも大型のデマイ紙を使った本の方が製本価格は高くなっている。また、デマイ紙・八折判の『信心の衰退』(31・35)は子牛革装で九ペンス、羊革装で五ペンス、ポット紙・八折判のフランシス・コルズの『詩集』(34・39)は子牛革装で六ペンス、羊革装で三ペンスである。用紙が大きければ、当然本は大型になり、それに従って革などの装丁用の材料も多く使う必要があり、結局それら材料費が製本価格へ跳ね返るものと思われる。ちなみに、「大型 large」と形容されている場合フルスキャップ紙以上の用紙、特にクラ

ウン紙が、「小型 small」とある場合にはポット紙が実際の本では使われており、当時の用語とそれが意味する実際の大きさとの関係を確かめることが出来る。

④ 本の厚さ

本の厚さと製本価格との関係では、厚い本、つまり葉数の多い本ほど製本価格は高い。元々『要録』には「厚い thick」「薄さ thin」という表現でこの違いを明記しており、ポット紙二折判羊革装の厚い本(16)は一シリング、薄い本(17)は一〇ペンス、四折判の厚い本(29)は六ペンス、薄い本(30)は五ペンスというようになっていて、実際に葉数を調べた結果でもこの点を確認することができる。例えば、クラウン紙・二折判のローリーの『世界史』(7)は六五〇葉で三シリング、ブルタークの『英雄伝』(8)は五九〇葉で二シリング六ペンスとなっている(いずれも子牛革装)。あるいは、デマイ紙・八折判の『信心の衰退』(35)は三七葉で五ペンス、『ジェントルマンの召命』(36)は九八葉で四ペンスである(いずれも羊革装)。葉数が多ければ、本は厚くなって材料費がかかる他、同じ手間もかかるので、製本価格が高くなるのであろう。

ついでながら、この「厚い」と「薄い」の境界は葉数で

見るとどの当たりにあるのであろうか。表1からは、二折判の羊革装では、(14)と(15)の関係が(16)と(17)の関係をロール装飾にした場合と見れば一〇〇葉前後、四折判や八折判の羊革装では、具体的な書名があがっているものが「厚い」本の事例であると考えられるとおおよそ二〇〇葉前後が境であったと見ることが出来る。子牛革装については表からは判然としない。

なお、二折判では葉数に関して子牛革と羊革とで連続性が見られ、表1を見る限り、一五〇葉以上が子牛革、それ以下では羊革で製本されることになっていたようである(12~17)。

⑤ 判型

同じ用紙、同じ葉数だが判型が異なる場合には、判型の大きい本ほど製本価格は高くなっている。ピーター・ヘイリンの『コスモグラフィ』(8)とトマス・トマスの『辞書』(20)はいずれもクラウン紙でほぼ同じ葉数であるが、二折判の前者は二シリング六ペンス、四折判の后者は一シリング二ペンスである。判型の違いは本の大きさの違いであるとともに丁数の違いでもある。したがって、本が大きくなることで材料費がかかることとともにとじる手間

がふえることも製本価格に強く影響するものと考えられる。

以上、五つの変数が製本価格の決定にどのように関係しているのかを見た。最後に、この五つの変数の価格への影響力の違いである。表1をみると、装飾の種類の違いや判型の違いが価格に強く影響しているように見える。だが、諸変数の価格への影響度を独立して客観的に計ることは難しいので、確証はできない。この問題は、ラテン語本や他の三つの『要録』についてより詳細に調査した上で、総合的に考察を加える必要がある。

むすび

小売製本の価格体系は、二ペンスから一ポンド半の間にあつて、次の五つの変数による関数に従つて、個々の書物の製本価格を決める仕組みになつていた。その五つの変数とは、表装材、装飾、用紙、厚さ、判型である。そしてそれぞれの製本価格との関係は、子牛革は羊革よりも高く(表装材)、箔押しは空押しよりも高く(装飾)、大きな用紙は小さな用紙よりも高く(用紙)、厚い本は薄い本よりも高く(厚さ)、大型の判型は小型の判型よりも高い(判型)。

従つて、ある本の製本価格を推計するには、その本の葉数を数え、折丁の仕立てから判型を知り、一葉の大きさを測つて元の用紙を推定し、装飾の有無や表紙の材料を調べればよいことになる。そうして得られた情報が次の作業、刷本の価格を確定する作業へとつながっていくことになるのだが、これについては稿を改めて論ずることとしよう。

(1) Edward Arber, ed. *The Term Catalogues, 1668-1709 A.D.; with a number for Easter Term, 1711 A.D.* (London, 1903-6), v.1, p.299

(2) 平とじとは、折丁の折り目に近い部分の厚みを貫くようにとじることである。東洋の歴史的製本に圧倒的に多いが、西欧でも特に薄い本に使われた。Bernard C. Middleton, *A history of English craft bookbinding technique*, 3rd ed. (London: The Holland Press, 1988), p.11.

なお、どの状態で販売されることが多かったかについて、管見の限りでは実証研究はなく、そのための史料も見つかっていない。ただし、平とじで販売するかどうかについては本の厚さで決まつたと考えられる。この点については次の文献を見よ。D. Foxon, "Stitched books", *The Book*

- Collector*, XXIV (1975), pp.111-24.
- (㉞) cf: Geoffrey Ashall Glaister, *Glossary of the book* (London: George Allen and Unwin Ltd, 1960), p.410; John Carter, *ABC for book collectors. Sixth edition with corrections & additions by Nicholas Barker* (New Castle, Delaware: Oak Knoll Books, 1992), pp.202-4; John Feather, *A dictionary of book history* (New York: Oxford University Press, 1986), pp.42-4.
- (㉟) Francis R. Johnson, "Notes on English retail book-prices, 1550-1640", *The Library*, 5th ser., vol. V (1950), pp.83-112.
- (㊱) 原標題が次の通り。一六一九年版…A general note of the prizes for binding of all sorts of bookes. Imprinted at LONDON. 1619. 一六四九年版…A General note of the prizes for binding all sortes of bookes. Printed at London 1646. 一六六九年版…A General Note of the Prices of Binding all sorts of Books: Agreed on by the Book-binders, whose Names are under-written. As it was presented to the Master, Wardens, and Assistants of the Worshipful Company of Stationers, August, the 2 d. 1669. Licensed, September 23 1669. ROGER LESTRANGE. 一六九九年版…A General Note of the Prices of Binding All Sorts of BOOKS in CALVES-LEATHER: Agreed on by the BOOK-BINDERS, Freeman of the City of London, And by them Presented to the Master, Wardens and Assistants of the Worshipful Company of Stationers, at a Court holden March, 1694/5. LONDON: Printed, and are to be Sold by John Whitlock near Stationers-Hall. 1695. この年代の語文は再録や多少の差—Mirjam M. Foot, "Some bookbinders' price lists of the seventeenth and eighteenth centuries", in Mirjam M. Foot, *Studies in the history of bookbinding* (Aldershot, Hants Scolar Press, 1993), pp.15-67.
- なお、現存本の価格は異なるが、美濃の町で出版された可能性もある。一六四九年八月六日に製本業者たちが、自分たちの望む製本価格についての文書がロンドン書籍商組合理事会で承認されるまで申請しつゝ。Court Book C, f.259r.
- (㊲) Cyprian Blagden, *The Stationers' Company: a history, 1403-1959* (London: George Allen & Unwin Ltd,

- 1960), pp.32-38.
- (7) Court Book F, f.218v.
- (8) 一六九三年に二頭当たり一三・五シリングであったのが、一六九四年には三・六シリングに急騰してゐる。表二五頁の上頁を参照。Peter J. Bowden, "Statistics", in Joan Thirsk, ed., *The agrarian history of England and Wales. Volume V 1640-1750. II. Agrarian change* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), pp.837, 893 及び註⑨。
- (9) William A. Jackson, ed., *Records of the Court of the Stationers' Company 1602 to 1640* (London: The Bibliographical Society, 1957), pp.54, 121.
- (10) D.F. McKenzie, ed., *Stationers' Company apprentices 1641-1700* (Oxford: The Oxford Bibliographical Society, 1974); Ellic Howe, *A list of London bookbinders 1648-1815* (London: The Bibliographical Society, 1950).
- (11) Court Book D, f.159v.
- (12) Court Book D, ff.162v, 171v (13th June 1670), and 277v (7th May 1677).
- (13) Blagden, *The Stationers' Company*, pp.92-101。理事会議事録の一六七九年六月二五日の欄に、初等読本製業者ジョージ氏に三〇ポンド相当の本のクレジットを与える旨の命令がなされてゐる。Court Book D, f.347v.
- (14) Middleton, *Craft bookbinding*, pp.165-9, 173-4.
- (15) Howard M. Nixon, *English Restoration bookbindings: Samuel Meerne and his contemporaries* (London, 1974), pp.12-22.
- (16) 調査対象資料は、英国図書館、オックスフォード大学ホブリー図書館、一橋大学社会科学古典資料センター所蔵のものである。複数の版がある場合には、できる限り一六六九年に最も近いものを対象としたが、現存状況や所蔵状況によつてそうならない場合もある。個々の資料の詳細については紙数の都合で割愛した。なお、二四折判については現物資料を特定できなかったので省略した。
- (17) Bowden, "Statistics", pp.832-9, 852-3, 893.
- (18) こつていうマールがどのような技法を意味しているのかは定かではない。というのも、マール装飾と言つた場合、この当時の三つの装飾技法を考へることが出来るからである。①表装材の革に酸をかけてマール模様を生

み出す技法、②マープル紙(見返しに使用)、③小口をマープル装飾する技法。たたいずれにせよ、王政復古前後にイギリスに導入されたばかりの新しい技法であり、小売製本でふつうに使われるようになるのは一七世紀末ごろのことからである。Graham Pollard, "Changes in the style of bookbinding, 1550-1830", *The Library*, 5th ser., vol. XI, no.2 (June 1956), pp.79-80; Middleton, *Craft book-*

binding, pp.33-4, 40, 98-99.

(61) Middleton, *Craft bookbinding*, p.289.

(28) 全紙の十法に「Philip Gaskell, *A new introduction to bibliography* (Winchester & New Castle, Delaware, 1995), pp.72-75. 46-47 頁」だ。

(社全経羊古典資料センター助手)